

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10560

研究課題名（和文）ピアサポーター参加型のがん相談支援ネットワークモデルの開発

研究課題名（英文）Development of a model for a cancer counseling support network with the participation of peer supporters

研究代表者

武富 由美子（Takedomi, Yumiko）

佐賀大学・医学部・准教授

研究者番号：20750342

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、がん診療連携拠点病院および地域統括相談支援センターのピアサポーターとがん相談員、患者を対象にインタビュー調査を行った。ピアサポートは院内や地域でも患者のニーズに合わせて提供され、相談員とピアサポーターは連携しながら、院内外の専門職や施設に繋いでいた。地域統括相談支援センターにおいても両者が連携し、傾聴や治療継続への支援、情報提供、長期的かつ定期的な相談を行っていた。支援を受けた患者は、診断時から長期的に相談員、ピアサポーターなど多方面からサポートを取り入れ、心理社会的に肯定的影響を受けていた。以上から、ピアサポートを組み入れた相談支援のモデルの一例を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がん患者や家族の悩みは長期化・多様化し、ピアサポートや病院と地域を繋ぐ相談ニーズが高まっている。がん相談員やピアサポーターは院内外の専門職や機関と連携しながら、思いの傾聴や治療継続への支援、情報提供など長期的かつ定期的な相談支援を提供していた。本研究は、がん相談員やピアサポーター、がん患者から得られたデータに基づき、がん診療連携拠点病院や地域統括相談支援センターにおける相談支援ネットワークの実態や課題の抽出および相談支援を受けた患者の心理・社会的変化を明らかにし、有機的な相談支援モデルの一例を提案できたと考える。今後、がん診療連携拠点病院と地域を繋ぐ相談支援ネットワークの構築に期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted through interviews with peer supporters, cancer counselors, and patients at a community cancer care base hospital and a regional general counseling support center. Peer support was provided both within the hospital and in the community according to patients' needs, and counselors and peer supporters collaborated to connect patients with professionals and resources within and outside the hospital. The regional counseling support center also collaborated with both counselors and peer supporters to provide listening, support for continuing treatment, information, and long-term and regular counseling. The patients who received support from the regional counseling support center exhibited positive psychosocial changes from the time of diagnosis to the long term, influenced by the support from various sources, including counselors and peer supporters. We propose a model of counseling and support that includes peer support.

研究分野：看護学

キーワード：がん相談支援 ピア・サポーター

様式 C - 19 , F - 19 - 1 , Z - 19 (共通)

1 . 研究開始当初の背景

- (1) がん診療連携拠点病院の指定要件のひとつに、がん患者や家族への相談支援と情報提供として、がんサロンの設置が推奨された。2012年、第2期がん対策推進基本計画では「国と地方公共団体等は、がん患者・経験者との協働を進め、ピアサポートをさらに充実するよう努める」と、ピアサポートの必要性が明記された。ピアサポートとは、同じ問題や状況をもつ人が情緒的に支え合い、その問題に適切に対応するための知識を共有していくことであり、患者会やがんサロンの活動、がん相談支援センターにおけるピアサポートが含まれる。ピアサポーターは、2011年、厚生労働省「がん総合相談研修プログラム策定事業」により養成されたが、ピアサポートを導入しているがん診療連携拠点病院は約20%にすぎない。その背景には、ピアサポートの質の担保への懸念、財政上の問題などがある。
- (2) がん患者は診断から10年経っても、再発の不安から精神疾患に罹患する可能性が高いと指摘され、その約半数の患者が心理社会的サポートを活用していなかった。さらに家族の精神的負担に対し、がん患者の6割が自身で家族の相談相手として話を聞いたという報告がある。また、一般市民のがん相談支援センターの認知度は1割未満で、がん診療連携拠点院内のがん体験者でも5割と低く、患者や家族へ相談窓口の情報提供が不足している。がん相談支援センターの認知度は低い一方、相談件数は年々増加し、がん相談のマンパワー不足が指摘されている。そのため、医療専門職だけで、がん患者や家族の心理社会的ニーズへ対応するには限界がある。
- (3) 治療の進歩により、長くがんと付き合いながら生きるがん患者や家族の悩みは多様化し、ピア・サポーター（がん体験者）による相談支援に対するニーズは高い。患者は悩みを聞いてもらい、ピアの体験談を聞くことで安心し、今後の見通しをもつことにもつながる。海外ではピアサポートの効果として、参加者の知識や対処方法の向上、自己効力感の強化などが報告されている。ピアサポートを導入しているがん診療連携拠点病院における相談内容では「不安」が最も多く、ピアサポーターは傾聴により対応していた。そのため、専門的知識がないピアサポーターでも、専門的知識を必要とする相談内容に対してがん相談員につなぐことができれば、がん患者や家族の不安や悩みなど心の負担を軽減する役割としてピアサポートの意義は十分ある。ピアサポートの安全性や質の担保のためにも、行政や医療機関、地域統括相談支援センターとの協働が求められる。また、在院日数の短縮化と治療の外来へのシフトから、退院後、地域での相談支援が求められている。がん患者と家族への心理社会的支援を充実させるためには、ピアサポーターとがん相談員との連携や協働、各機関との連携の在り方やシステムづくりが必要である。

2 . 研究の目的

- (1) ピアサポートの実際とがん相談の連携や協働内容の実態を調査し、その課題を明確にする。
- (2) 支援を受けたがん患者や家族の実際と心理社会的変化から、ピアサポーターやがん相談員との連携・協働に対する内容を検討する。

3 . 研究の方法

- (1) ピアサポーターの活動内容とがん相談員との連携や協働に関する調査

対象者

便宜的サンプリングで研究協力の同意を得たがん診療連携拠点病院 1 施設のピアサポーター 1 名とがん相談員 1 名、および地域統括相談支援センター 1 施設のがん相談員 3 名とピアサポーター 1 名

調査方法

半構造化インタビュー調査

調査内容

ピアサポーター：属性（ピアサポーター研修受講の有無、ピアサポーター歴、活動の経緯、がん罹病期間、治療の有無）、活動内容（がんサロン、個別相談）、相談に対する連携や協働の内容や課題、ピアサポーターへの支援の有無・内容、やりがい、困難に感じる点、院外での活動の有無など

がん相談員：属性（職種、専従・専任、相談員歴、1日の相談件数、相談内容）、がんサロンについて（予算、運営上の責任者、運営委員会の有無、活動の主体者、場所、回数、内容、1回の参加人数、評価の有無、継続への支援、問題発生時の対処）、ピアサポーターとの連携や協働内容と課題、がん種別の相談内容と対処、院内スタッフや院外機関との連携や課題など

- (2) 支援を受けたがん患者や家族の実際と心理社会的変化

対象者

がん診療連携拠点病院および地域統括相談支援センターでがん相談員やピアサポーターによる支援を受けたがん患者や家族で研究協力の同意が得られた7名

調査方法

半構造化インタビュー調査

調査内容

対象者の属性：がんの部位，病期，治療，医師からの説明，支援を受けるきっかけ，がん診療連携拠点病院および地域統括相談支援センターでのピアサポーターやがん相談員による支援内容，心理社会的変化

(1)(2)について

分析方法

質的データについては，意味の類似性からカテゴリー化した。

倫理的配慮

研究への参加は完全に自由であり，協力の是非により不利益は生じない事，得られた情報は，目的以外には使用しないこと，個人情報保護，途中でも辞退できることを書面で説明した。また，インタビュー調査はインタビューの場所や時間，ICレコーダーによる録音についても書面で説明し，同意を得た。また，プライバシーが確保できる場所でインタビューを行った。ピアサポーターや支援を受けた患者は，がん体験者であるためインタビューの前・中・後の体調に十分配慮し，インタビューの時間は30～60分とし，がん相談員については業務に支障がないように時間や場所を事前に調整した。本研究は，佐賀大学医学部倫理委員会の承認（R1-22）を得て実施した。

4. 研究成果

(1) A がん診療連携拠点病院におけるピアサポートを組み入れたがん相談支援ネットワークと連携

ピアサポーターはがんサバイバーでピアサポート歴17年，がん相談員は専従で，経験年数10年であった。ピアサポーターは，抗がん剤治療を拒否する患者へ治療体験を話し，不安を軽減させ，治療につなげていた。また，がん相談員は，がん告知時の説明に同席し精神的ケアを提供したり，治療の手立てがないと告知された患者家族の心理的苦痛を軽減し，他病院の緩和ケア認定看護師へ繋いでいた。ピアサポーターは，がん診療連携拠点病院相談支援部会の委員であり，がん相談員，各サロンや患者会と連携していた。がん相談員はピアサポートを含め，院内外の組織と連携し相談支援ネットワークを構築していた。

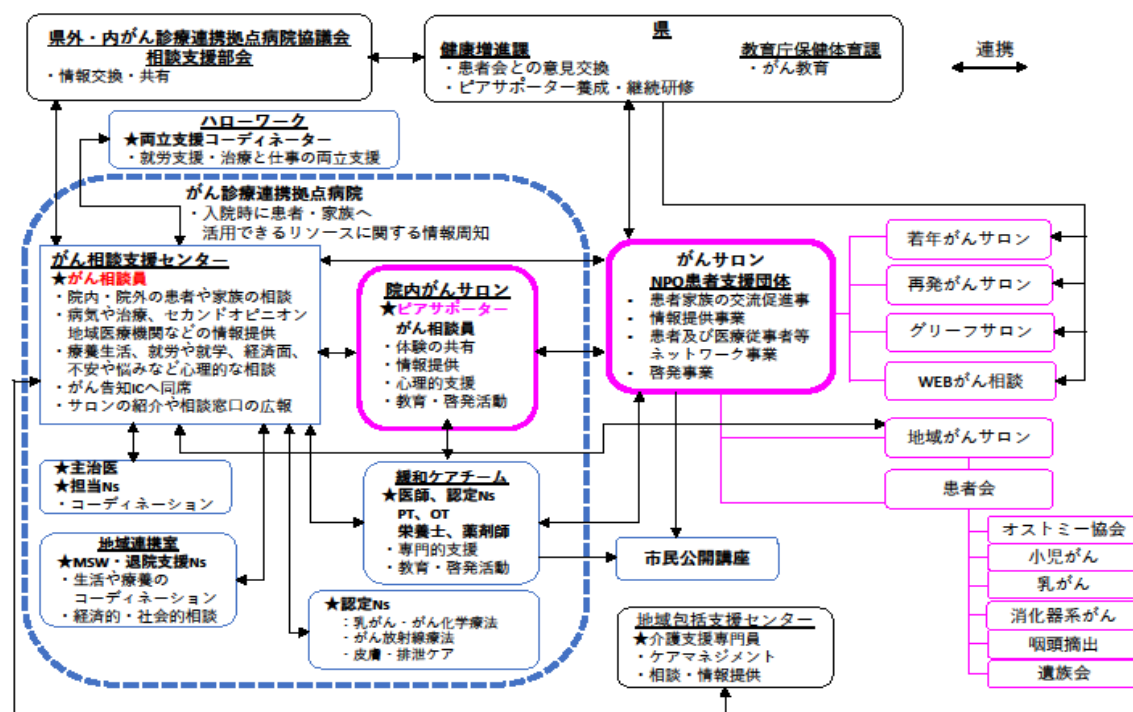


図. ピアサポートを組み入れた相談支援ネットワーク

ピアサポートを組み込んだ院内外のリソースと連携することで，治療や生活の実体験に基づく情報提供や体験の共有，患者や家族のつらさを聴くこと，専門職へ繋ぐことで患者や家族の心理・社会的サポートができる。また，個々の患者や家族に寄り添い，年齢や疾病の経過を問わず，患者や家族が地域で安心して暮らせる支援が必要であることが示唆された。今後，がん診療連携拠点病院と地域のリソースを繋ぐ人材の育成が求められる。

(2) 地域統括相談支援センターのがん相談員が捉える役割に対する認識

がん相談員は看護師2名と保健師1名で，経験年数は4～6年であった。がん相談員は，「がんの疑いや告知」，「再発に伴う戸惑いや不安」，「今後の生き方の模索」などの【相談者の思いの

傾聴】、「治療へ向かう気持ちの後押し」「医師との関係性保持」「仕事の調整」などの【治療継続の支援】、「アピアランスケア」「緩和ケア」「グリーフケア」の【療養生活に関する情報提供】、【ピアサポーターや社会福祉士との連携】や【長期的かつ定期的な相談】を役割と認識していた。患者や家族はがんの疑いや告知された直後から患者が亡くなった後まで長期的に相談支援を求めている。がんの診断時には全ての患者と家族にがん相談に関する情報提供を行うことで、相談員が長期的に患者や家族の心理・社会的苦痛を軽減し、治療と療養、社会生活をサポートする役割を担うことができ、患者や家族の生活の質を高めることが期待できることが示唆された。

(3) がん相談支援センターおよび地域統括相談支援センターのがん相談に関する課題

ピアサポーターからは、患者や家族、医療者へのがん相談に関する周知が不十分であること、医療的相談とそれ以外の相談に関する連携上の課題、ピアサポーターの質の担保、がんサロンの運営資金の確保などが挙げられた。がん相談員からは、がん診断時に相談に関する情報提供を受けていない患者や家族が多いこと、院外や他の機関へ繋いだ場合の評価が難しいことなどが挙げられた。

(4) 支援を受けたがん患者や家族の実際と心理社会的変化：1例

【子育て中のがん体験者の精神的な成長】

A氏は、夫と小学生の娘2人の4人暮らしをしていた3年6ヶ月前に乳がん告知を受け、乳房全摘と再建手術を経験し、ホルモン療法を継続中であった。診断時に、外来看護師からがん相談支援センターや患者サロンを紹介され参加するようになった。がんという病気や治療・再発への不安、生活のこと、幼い子どもたちへのがん告知やその後の関わり方など広範囲に渡って心理的サポートを受け、それがA氏の治療に対するモチベーションに繋がったことが分かった。また、ピアと体験を共有することでがんになった自分へのスティグマを克服し、自尊心を取り戻すきっかけとなった。サポートの形として、がん相談員、ピア・サポートグループのメンバーを中心に医師、看護師はもちろん、家族、特に幼い娘たちからの言葉にも支えられることが多かった。A氏は、ホルモン治療を続けながらピアサポーターとしてがん患者や家族の心のケアに携わるようになった。

幼い子どもを抱えるA氏が乳がん治療に前向きになれたのは、がんと診断された時から看護師より心のケアに関する情報提供があり、定期的ながん相談員やピアを中心に心理的サポートを受けることができたからだと思われる。状況やニーズ(例：泣きたい時、不安や孤独感に陥った時、子どもへの告知や子育てに悩んだ時など)に応じて相談相手をうまく選ぶことで、不安や孤独感、悲しみなどを乗り越えることができたのではないだろうか。そんな患者が、自尊心を取り戻し、幼い子どもとともにがんと向き合うことによって、家族とともに精神的成長を遂げたのではないかと考える。子育ての時期にがん告知を受けることは計り知れない不安と焦りに苛まれるが、多方面からの心理的サポートを取り入れることで、子どもたちとの関わり方や治療に対する態度、将来への展望にポジティブな影響を与えることが示唆された。

以上、研究成果(1)(2)(3)(4)から、がん診療連携拠点病院におけるピアサポートを組み入れたがん相談支援ネットワークと連携の協働の実際、地域統括相談支援センターにおけるがん相談員の役割、がん相談に関する課題、支援を受けたがん患者の心理社会的変化の例が明らかになり、相談支援モデルとして提案できる。今後、がん診療連携拠点病院を中心とした地域のリソースを繋ぐ人材の育成が求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yumiko Takedomi, Yasuko Tabuchi, YuKi Kumagai, Maiko Sakamoto
2. 発表標題 Perceptions of the Role of Cancer Consultants at Regional Consultation Support Centers
3. 学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars 27th (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 坂本麻衣子、武富由美子、熊谷有記、田淵康子
2. 発表標題 乳がん患者からピア・サポーターへ - 子育て真最中の患者の精神的成長の記録 -
3. 学会等名 第46回日本死の臨床研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 武富由美子、田淵康子、熊谷有記、坂本麻衣子
2. 発表標題 A病院におけるピアサポートを組み入れたがん相談支援ネットワークと連携
3. 学会等名 日本看護研究学会第47回学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田淵 康子	佐賀大学・医学部・教授	
	(Tabuchi Yasuko) (90382431)	 (17201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	熊谷 有記 (Kumagai Yuki) (10382433)	佐賀大学・医学部・准教授 (17201)	
研究分担者	坂本 麻衣子 (Sakamoto Maiko) (10720196)	佐賀大学・医学部・准教授 (17201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関